

桜蔭俳話会 通信句会 (第百一回 二十三年春)

高得点句 自句自解

十一點②

被災子の言葉たのもし卒業す

藤本 友子

今回の大震災では、石巻に住む長男が被災しました。六日目にようやく携帯電話がつながり元気な声を聞いた時、本当にたのもしく感じたものです。また、テレビから小・中学生の卒業式の風景が流れ、子供達が自分の町の復興を誓っている姿に感動を覚えました。そこで「卒業す」という言葉を組み合わせた次第です。

十一點①

笑ひても泣きても撮らる子供の日

野上 貞勝

親族一同集合の宴の時に、カメラ付携帯電話で、若い者がお互い自由勝手に撮っていた時の実景です。

十點②

街なかに蜜蜂飼はれみどりの日

佐渡谷 秀一

かつて藤田湘子さんは、テレビを見て句を作るのは宜しくないと述べられているが、この句は自由が丘を特集した昼のテレビで見た光景である。採取した蜂蜜は近年名物となっているケーキなどに使われているとのことであった。自由が丘は昔、住んでいた隣町で、先日の中学の同窓会の時聞いてみると、蜂を飼っているドルも判明した。銀座も蜂を飼っているのが有名であるが、「街なか」という言葉は自由が丘の方がふさわしいのではないか。

十點①

青春の昭和も遠し緑の日

瀬戸 溪水

私にとって昭和とは、神中入学の六年満州事変勃発、卒業目前の二月二十六日の事件、十二年に始まる日中戦争の学生時代、社会人らしくなった十六年の太平洋戦争など多感な青春の底には戦争という暗い時が流れていた。それでも米軍の空襲が始まるまでは国内が動乱の地になることは無かったから、個人的にはそれなりの青春を過ごす余地はあった。

戦後自由とか人権とかが文字や言葉に強調される一方、岩波新書に「自由と規律」が

出版される時代でもあつた。戦後既に六十六年、昭和も青春も遙か彼方になつた。戦前の天長節は緑の日となつたが、四月二十九日は正に緑の季節の真中、心も新鮮なさわやかな世界である。庭仕事を終えて部屋に戻つた折りに浮かんだ一句である。

九点①

夏つばめ「とらや」の看板右書きに

野上 貞勝

「とらや」は赤坂の和菓子屋。車で行つて入店しましたが、中は家紋と虎の漢字でした。夏つばめは左右に飛翔しています。看板は歴史を感ずるとんと黒張調。

因みに真さん。映画の草団子のとらやは、柴又帝釈天参道にある。

九点

釜飯のおこげのうまさ労働祭

野上 貞勝

釜飯は注文して小半時待つことで、労働者には息抜きの出来る、せつかちの人は頼まない。見れば老人が多く若い人は少なかった。釜の底に残ったこげた海老入りの飯が好きでした。働き盛りの中に戻つた感じで詠みました。

九点

菜畑に園児の帽子見え隠れ

安中 忠夫

入園して間もない幼稚園児達が春の暖かい日ざしに誘われて近くの河原へ散歩する畦道に背丈ほどの菜の花が咲き競っており、賑やかにはしやぐ声と園帽が見え隠れする愛らしいさまを見かけたので詠んでみました。

七点

草餅や碓氷峠に一里塚

平井 与史

娘達と軽井沢に旅行した時、碓氷峠まで行ってきました。バスで三十分の距離です。展望台より上毛三山（赤城、榛名、妙義山）が、背後には浅間山が眺められる。江戸時代は中山道が通り、かなりの人通りがあつたようです。

七点

穀雨だに恵とならず被災地に

桜井 幸枝

春雨が降つて百穀を潤すという穀雨。しかし、被災地にとって東北の四月、春雨といふほど冷たく寒ささえ覚えるであろう。まして津波で衣食住すべてを奪われ、田畑は海水につかり、被災者の傷みがひしひしと感じられ、雨を見るのもつらい思いがする。